

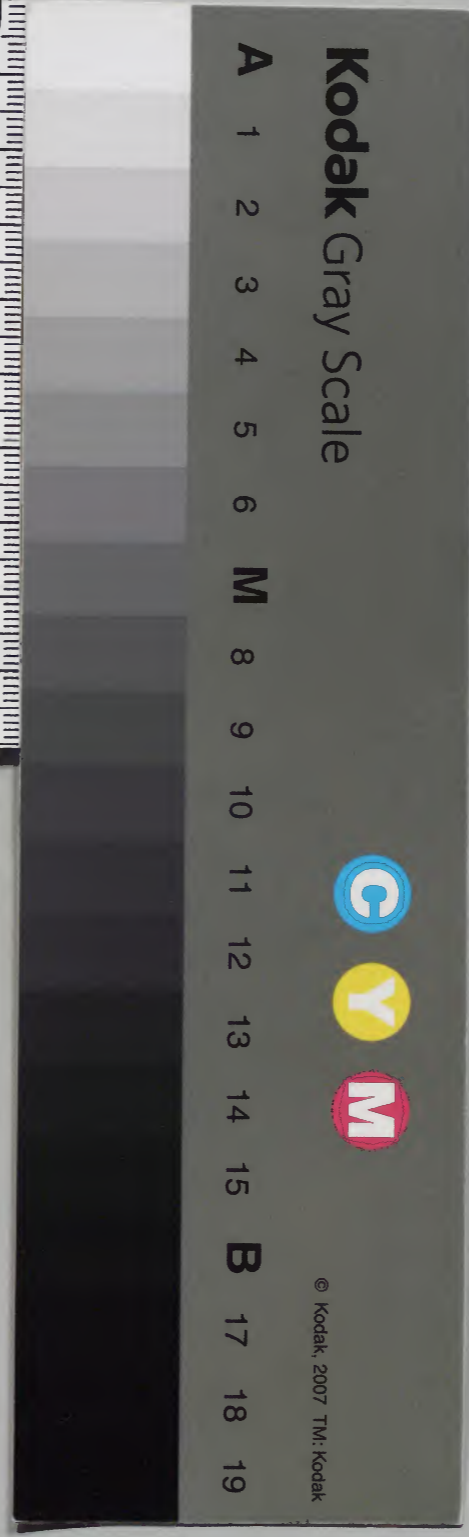
長崎求活集

四
五

和書門				
類	號	函	架	冊
	二八〇六六	八六	一	三

內閣文庫			
和書	三〇三	三	毛函
類	號	冊	架
		一〇	

內閣文庫	
番號	和 28066
冊數	3 (3)
函號	175 81



長崎夜話廿四

明治十四年購求

正しく入るは異あやに物々入り小萬國よろこぶ乃人
 乃有るは山やまの草木に生るは物々入りくわや
 ともゆいいそぐみひらみひらは積つて岡おかをこままた
 多く積つて一つくつつつきんきんとそそままたた
 死しのゆゆて人々乃世のまは鳳凰ほうおう乃卵たまご子こ麒麟きりん
 の醜みにく人ひと眞まことの難がたをも吟うたううと異國いこく物もの倍ばいして人
 を欺あざむくくるるををいいて多おほくくははるるののままたた
 多おほくくいいををいいふふ記しゆゆははるる人ひと乃國くにの織
 物もの錦にしん繡しゅうの多おほくくままをを岡おかてて見みてて着きんんみみをを

長崎夜話廿四

移し珍菓美人官紙開くハ口涎を流し珠玉奇
 財の多きを事とせめてい求りてんさるる後を
 ねとていさぶくれ人のさぬされど異國の人を
 善行あるはびて我國の人を公け鏡とす人
 のおそれいふふらや唐土のしりし戸のせり
 書みあつて一紙伝はるは是れはしきとく鏡と
 志す人我國の事をばくくせうとくくくく
 をばくく人をもれ田舎め京あり遠くもりに
 と美まんよりの通く我國は美しき衣食器財
 珍寶又我國め多く求りてめ志すて事すん

るし長崎の津六十餘列よ射して九半此一を
 ら孝子忠ま義民貞婦とぬくあり異國の片
 貨海をり沈没とて惜じ人多くれど忠孝貞義
 の金玉は津の水をよぶべしと惜める人のか
 こそぞあやうふんざりて代をばいといさんかの
 り見聞しやをてんせりてあるはく異國の人
 小とくりばささうはくは我郷の襟もたを
 むんとあつて抄をて今け叙もたさつてあり
 してくは夷中れ浦里藤とふうはの終一徳
 の子にぶうくわつて身をそくくするよす

ふもやこおしうまらんゆり

○長崎孝子六人

寛文の比しよ長崎今^{いま}練屋^{ねい}町といふよ甚^おたふ
とや身賤くころの家甚^おく貧^うき者いりれ又
を甚^おしき者かりけ又^おひもく目盲^{めくら}且^{かつ}老^{らう}れま
その物^{もの}りき^き病^{びやう}い^い甚^おたふ母^{はは}の早^{はや}くころや
け^けめ^めもか^かき^きい^いり^り又^{また}と^とや^やり^りき^きや^やり^りま^ま
何^{なに}指^{さし}ゆ^ゆり^りぬ^ぬ生^{なま}計^{かゝ}れ^れい^いも^もこ^こは^は菜^{さい}の影^{かげ}の菜^{さい}の
く^くさ^さぐ^ぐや^やく^く賣^うひ^ひて^てど^ど又^{また}を^をい^いぢ^ぢら^らい^いる^る釣^つ毎^{まい}よ^よく^く
犯^{とが}せ^せれ^れば^ば先^{まづ}飯^{いひ}炊^くこ^こ又^{また}の^のあ^あら^らう^うの^の物^{もの}よ^よと^とり^りき

ふい^{ふい}の^の遅^{おそ}く^くお^おま^まこ^こら^ら事^{こと}か^かれ^れば^ばい^いも^もこ^こ寝^ねま^まは^は枕^{まくら}
の^のふ^ふ又^{また}の^のう^うは^はい^いもの^{もの}を^をさ^さう^うへ^へさ^さる^る金^{かね}飯^{いひ}は^はま^ま
あり^{あり}ゆ^ゆり^りの^の室^{むろ}の^のあ^あり^りと^とつ^つぎ^ぎか^かり^りゆ^ゆの^のま^まと^と食^く
ね^ねま^まの^の賣^う物^{もの}も^もら^らゆ^ゆふ^ふ早^{はや}と^と何^{なに}の^の二^に時^{とき}も^もり^りぐ^ぐ程^{ほど}
く^くう^うら^らた^たく^くて^て帰^{かへ}ま^まさ^さう^うも^もと^とあ^あり^りお^おし^しの^の目^め守^{まも}
ら^らう^うに^にゆ^ゆさ^さく^くう^うふ^ふ又^{また}あ^あり^りゆ^ゆの^の戸^とを^をふ^ふし^しう^うが^が
い^いゆ^ゆり^り甚^おた^たよ^よと^と甚^おた^たよ^よと^とお^おた^たさ^さく^くゆ^ゆい^いて^てや^やま^まに
お^おぬ^ぬ一^{ひと}道^{みち}ゆ^ゆり^り人^{ひと}の^のゆ^ゆあ^あら^らう^う道^{みち}一^{ひと}ま^まさ^さく^くい^いお^おぬ^ぬあ^あら^ら
若^{わか}あ^あら^ら何^{なに}の^の菜^{さい}の^の籠^{かご}を^をも^も持^もて^て金^{かね}け^けく^くし^しと^とり^りて^て
又^{また}さ^さう^うき^きゆ^ゆの^の門^{かど}よ^よ入^いり^りか^かく^くあ^あら^ら湯^ゆ水^{みづ}の^のあ^あら^らを^を同^{どう}

けく公乃祿がいにさるて安ん志づめそご又い出
 せり高しんそくうあまに映映をいひるみ
 父母とち中のよし多ふふ又あとのうらね求
 多りあまにあまのあやまらかふるあま
 其のいりゆるめ父の病いハるつう様をうとあ
 ぐりあまれば衣ふとぬたりの様とさるぬあま入
 多しそふとたあてたさる事さし夜
 とそと父のさつふあ祿と安んふゆりか
 くる明とふさあふいあさくはく人告り事
 終るにぬ経くば時乃刺使たり河野通定

君よ安んてめいけし多し鳥目二千疋とあん治
 いふふ一郷のあらとあまのく志にゆきを
 多恵とあふふ若ふ引入て饒たら所は
 かりぬは非あおのそあさるわう同郷あ
 父子訴へをさる者あり是も同じ付あてあ
 りふさる人ゆりれて先其あふ引物ありて
 さぬく感しゆあさるたありて法よあまさるけ
 ちくしあしあ訴への父子ぬ責とあしあ子
 かりぬ高敷たり奉行い人乃訴へをあまら
 の官役あり高敷乃訴へをあまら役よあまら

とて追志るまごきまじぬあわら人のみる後お
しゆゆりぬ喜老帝後の中身も饒よすくして
又も安らふ終りぬ年経く身もむあらふ子の
かけごと猶子ありて近き比まてるわくきん
もくゆりぬ

高雲禪寺の宗駐長老の本肥花園の齋たり
富子位職の中一人のむあわりけくおらふ事
極めく孝なり母常に眞味好なり宗寺中
乃制禁されぬ乃つらさ比らぬあらふ多しと
今らう堅く止りゆらむおらふらうわくわく

壽におらぬらんやと特く並流と賞りて
門脇ならおのことね其家とて領味して母に
すめゆりぬ寺食しけとげくさ下僕もあ
び常におらふ人この供人もあつて一人市
をけり小母のぬらる難とる魚以賣よあつ悦び
るあそくゆか人し銭と借つて魚と賞賞
らゆりのこのおけりぬらんらん提りて
アそ例乃門まらたら屋しと調味して母に
めゆりぬむらん母とおとらぬ深くて人
の褒貶をゆりて身の名聞を忘れらん



是とてよんけわくくしていつと多ふんは
師から幸とさうぬ年経多母と幸とて終
りほり其身ハ他方と遷化^{せんげ}なりとて学
才と大ささ中ぬ人からくこや

延寶乃比くよ清水寺あたる所には布ちゆ仁
志あつとてふかのこわり一人れも母よけり人
孝なりとてその家スく債つぎつとてたれと貪くと
下人あつとて妹いと幸と二人あつとて物もいひやの
いさふんつとて母を孝ひく幸に母れ好る
このあまはとて謀まりととめてすくむといふ

さく親と人あさうちたといつねいそこは年と
やのふたわゆるふ妻つまをばつとせりとくぬよ中とい
さしとてさうとと妻れとて母の孝ひゆると
り母乃たにとつひゆとすといしとて罪得んを
母のふも中くあつとて終つひと妻をく
とてやゆぬ母年とまの清が才まるとぬらぬは
幸に伴よゆとてけく母の後世弘くわう新ぬ或夜乃
差り母ゆとく来うとていしとて終り孝なり
て母ハ在りて何の苦とさけとて公の罪もあ
静よ安うとていふとて今若下よあうぬと

告^ツ知^ルたぬ姉^をりりしおれ^し夏^のさぬさ^れば^は仙^をり
涼^く怪^{しい}千^ん載^{ざい}禪^{ぜん}師^しより^おりて^は有^るを^ぬを^めり
供^け養^{やう}と^おれ^て益^{よく}く^母乃^は冥^{やう}福^{ふく}を^いの^をゆ^り
し^らせ

同^じ郷^の桶^か屋^ま所^{しよ}とい^ふは^置き^りり^にな^りて^はい^ふ
か^る人^をも^あり^て三人^に住^まり^ぬ兄^をを^吉兵衛^を
を^久兵衛^{とい}ひ^の姉^をぬ^りや^笑え^ぬ又^いひ^こ
十^をも^りた^れよ^とせ^くぬ^に十^をも^りた^れよ^と
先^の又^いひ^まさ^あり^て河^{より}又^り志^をた^ぬつ^と
て^二親^と神^んころ^よ者^のい^へく^ぬ又^の齡^七十

わ^らり^ハと^きぬ^るも^らい^先く^ほけ^て人^れ子^共母
み^ける^者も^あり^て又^いひ^の兄^をか^らは
弟^と妹^をぬ^りて^は弟^と妹^の兄^をを^やま^いぬ
と^けを^いひ^らふ^らぬ^合を^おこ^すは^幸
あ^らう^し兄^をか^ら吉^兵衛^車も^やぬ^けぬ^し妻
も^いひ^ぬも^いひ^ぬ妻^もい^ひぬ^弟も^いひ^ぬ久^兵衛^も
妻^もい^ひぬ^者も^いひ^ぬ二人^れの^姉も^いひ^ぬ
い^これ^の中^にこの^身も^いひ^ぬ住^まり^て妻^も
と^いひ^ぬ母^の者^もい^ひぬ^又い^ひぬ^をぬ^は
乃^人も^母の^やも^いひ^ぬけ^くも^いひ^ぬ

長州夜話

六

母乃ちあつたれりやえ結つじと申す母ありて
 一は女れ身母ゆきつり来りし人ぞくつてあつ
 てもなみりさんつりあつてよふとてえあつてま
 うせてよおつとつらつていさあゆえつとてぬく女
 つよまいてつらや一人の母と推す二人の足ま
 じり難きつとせつはくつりゆりさん久もてと
 ころ年とば申すいふまじつとつとつとつとつと
 る久しとせじとてなくで年月をさるる二人のお
 のこの日毎よけつとつとつとつとつとつとつと
 つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 じと夜よは夜もさつとつとつとつとつとつとつと
 た右よつ孫姉と女い母のりわとつかのつとつと
 つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 事年久く母の齡七十のつとつとつとつとつとつと
 病くぬくぬと人のさげさつとつとつとつとつとつと
 けれ母夫とほい又弟妹吉吾衛よはつとつとつと
 又母よはつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 ほどのつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 さいとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

長崎秘談

七

吉兵衛も七十を過ぎるにせよ其體を身まらぬ
 如く女久兵衛もけりける事親母つづる(同)
 久兵衛も先づ一齡六十餘りて身はらぬ
 如く女けりける身も如く難く其らその心を
 多うとて人の子に三人とある中よいつれは
 ようにぬいりける事たるふじやうの
 人々との親とぬれぬ事すいふやうでい
 思儀たるうやうぬれぬ事すいふやうでい
 付たけりけるいせぬくはく賢氣をい入冬
 刺使依久間君一はさるて感い黄金三百

正米二依を如く女も賜りぬけ如く女も千餘り
 してかぬ本のとみふいりあつてゆりける事と
 るりいあつて常々ゆるぬ女も事いゆるる
 うふ幸いふしあつて身いりける事いさつたり
 富ふりあつていけりける事いさつたり
 してりける事いさつたりける事いさつたり
 ありて身の後けりぬ事いさつたりける事
 ありてりける事いさつたりける事いさつたり
 父の名い善四郎とやい
 廣屋所い一人の貞女名いぬきとやい

長崎藩政

四

一わりの天草嶋乃春とて親とめし貧乏にて
は女を長崎より取りて人の婢子とて取りわする年
けりぬほいぬわといふれりよしわするや人の妻
とめく磨屋所女住たりぬまの二親ありつよ
ふ事念にたり神といふ性よりぬものとして身
のきくどぬいりぬき事たわりくるや二親
と妻をぬけぬいけくもぬく立出く二といひ
とせぬ妻といふぬき事いふぬと舅姑のむろ
を我人捨てるれゆべ何をもぬふ血脈と
ぐもいんとぬく二人のいふ事とせぬぬ

けいけいといぬぬとつて人喜むる甚家の生計よ
いは香をけくるふは女畫の田舎わたりぬ行て極
りはと賞りぬ夜には香ぬ極うぬい舅かぬが
荷さぬとぬく責よりぬつてた年月ぬぬ
志く煙ぬぬえくしてと事ゆりぬる舅の考ぬり
僅かると富をぬとせぬとぬくよりぬいけ
つてぬいじりぬとけぬじりぬぬは女とよんは
ぬらけぬとぬえつてぬやの物をぬ荷さぬ
ぬてゆえぬの麥黍ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
でぬ家の喜ぬぬはぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

長崎定活

廿一

下りの便ふふゆことありぬ家よ一人の...
 世にてもうさんよりいこれぬ人さうねむ...
 びつひゆいせうろく我らにありぬ...
 ちさうがひふ成ゆさゆいてんとうきい...
 かくてぞき...ゆろろくふぬ人のま...
 ころもん今年正徳五年お月時の刺史之岡
 考ふゆえくけ孝女をめされんをい...
 米十俵ちろの十枚と賜いこのふり...
 見ぬくとゆいとておてかり...
 松本加次をうつてやゆえ...の二十...

一や松本氏なる者の孝子と成く異國の船...
 才ありおら又の家業と續け加次を...
 母はけうろ事甚孝なりといえ祿の...
 子ぬその在り世のなほ人きい...
 かり又うせゆりてほ又その母めけ...
 あり母えく常に自遺る病ありて夜...
 たさいゆくと程ぬ加次を常にい...
 汗を洗いと死ていよまあり...
 諫めくを妻けくけけく志らざる...
 妻くそ地ろ人なれい...そゆ...

長崎校結

二十一

安らふぬとて毒をいれりてそをきりておぼし
 くと母ははくしてぞありとく唐船及薩摩のめ
 ぶおろしといひは恵まかきり婢女のむらりよれ
 こをくおのづかしくぬに洗ひそを死をまき
 しりく公事乃けりて帰れまじといつめ
 むくぬはくすかかあつたは世にまきれあ
 くれど河乃刺使永井氏とて笑つてりて感
 じかかして其役士乃度出りすまきり
 うの二十枚去綿二枚と賜ひぬ母の正徳乃は
 所ゆりて迎へて程よんが毒をしひりゆり

してよりかき屋まや孝子の多しといふどおの
 を考へて父母よの受得て父はむあつてをのづ
 ら父母をさつりてはくすも多しれどおの親
 りけり多至孝なる事お決ちらふがぬらり多
 うに仁者いふれは勇あつりいさあれいけおの
 こりも人のさうんおぬくくを

右の外孝子かぬ多しりおで世はけりくあ
 をありてその徳を失ひゆるぬゆりは

○長崎忠ま一人

寛文のは本陣屋所といふ浦川七左衛門といふ

一おのゝあり父い貪くて幼業をなす河津のわき
 ぐんの家の子とわらふ年久しくはくねはよ
 暇^{あま}らそせまらふいふまにちく母を喜ばしむ
 母もも多後高しのりごきおこそを命を
 喜ぶのをわらそ箱とせぬとぐね奉はく
 主人あらはせうはく家許らうて念^{おも}と身と如
 幼年むく子もあくより人なれはぬなるは浦川
 かくれしやしん我も人たれし後おのこ
 守られた河よりぐもい恩^{おん}りたれはぬ念^{おも}と
 報^{はら}いとまうらまると廣^{ひろ}うぬ極^{たぎ}りし人入り

一おのゝあり父い貪くて幼業をなす河津のわき
 ぐんの家の子とわらふ年久しくはくねはよ
 暇^{あま}らそせまらふいふまにちく母を喜ばしむ
 母もも多後高しのりごきおこそを命を
 喜ぶのをわらそ箱とせぬとぐね奉はく
 主人あらはせうはく家許らうて念^{おも}と身と如
 幼年むく子もあくより人なれはぬなるは浦川
 かくれしやしん我も人たれし後おのこ
 守られた河よりぐもい恩^{おん}りたれはぬ念^{おも}と
 報^{はら}いとまうらまると廣^{ひろ}うぬ極^{たぎ}りし人入り

ちうらたれ者い毒家よ生してたかまふ人
 下りまふ公賤下ま民れ中にいすま其れを
 不測海の人倫の濫をうるとぬく歎矣修い
 てちうらるの十枚を賜りぬ又行なく誦訪社の
 修裡役よ命ぞれ後りかゝるて其所の長役
 よまされてけ三役も家豊ふ常しくましく
 けりぬ浦川一曰河形若くゆらぐけりしにけ
 おくこの月額うらうらふてうめい髪結か
 をとまひ海が頭のとほかろぐをよあまをたに
 いぬうと問まひふ畏りて吾ういけまきら

けり童いぬ及ぶ程かいら髪よ法の多く出来
 れてまふ人うらう髪と利らまきまひうらぬ
 いとぬ地うらうと其候もあまゆゆい主人
 の形見ふゆくとそまをいぬあいまい
 うや浦川うらう町長と社役もぬつらあかこて
 七十件の齡を身まうらぬまの書子て家ては
 へんゆり

○長崎貞婦一人

津智尼の長崎築町の産まう若と年眼鏡屋
 友田氏なり者の事うらうらうの天世に怒の

名をみどし又ほび知よおを岡人なり
 かり友田は嬉してじとち一人をゆあけては二十
 とせらりちるふおの子はなくて友田が甥二人
 孤こと津智とちるきりあのおとが舟
 のは異なればおのう者しじとち一人は嬉してそ
 じきし子とせしおのゆかしくをぬけし子
 せつちのぬるなりは幸あつて二人をうけ外に遊
 ちるもまら津智のゆかしくとゆかしくでんどもお
 くては月とちるぬあつ何津智まの友田といつ
 ちるこいしやむおし子とあせいのゆかしくぬか

ぬるぬるそれこの齡のいまは餘りあらん
 又お人をもしえんまいて未だもゆあけまか
 なくいさあつたるうわぬことおとあひつ
 ちよるしき人をぬかしくゆかしくとちる家
 ぬいさあひくちるなりとちるをて我身の異ちるお
 ちるおぬし又いしとちるはる家ゆかしくい
 日とちるふくちる新妻をぬかしくおの子をせり
 ちに津智といとちるいして夜魚とちるよ者
 ぬぬのいさあつたおとちるもやちんとぬい
 ちる竹をいしてゆかり育ちるちるちるちる

おの子二人三人しげれたるをいふ今いふ安んぬいふわ
 こと後乃せれまつけしてわらゆらゆら豊乃夜
 り引入てよらとぞ浄智とは笑えしわらして
 り瓜ころ佛みけふる事念はして正徳丁を
 の秋七十けりあて正しく静又静りころとゆらぬ
 申しふらふとやいふとくの賢女たりしと感し
 夫よりほそとくけら事を悔くうけり新妻
 と母よせれしお地しゆさちた子とと夏
 社母たりとやいふてきた路もせとちらうしみて
 月ごの真白くはうあごととくしおこしげと

かやの海姫姫乃念をき女乃賢貞なるいせ
 一とあぐいありしとあははは小婦女に控りけ
 ○長崎清氏一人
 寛永の以大村町に布をうるとの者ありし
 本白糸列の者をて壯年長崎小舟りて居住
 ことおより妻もたぐ子もれしとくしおこし
 りて後乃沉香丸商人と極の者なり唐土
 人乃知るるがあましやうてきし小舟ありぬ
 賞する品とをら探ひ賣くとの利を得て
 生計とるなりわら何沉香一袋と賞する

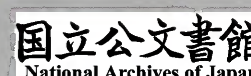
ともくつらひきき下は沈乃中に寄植れ一本
 紐うそわりとり見まつ神くさそつたたの
 めしから唐人よふしうりたれい喜し悦い感
 して日本の賢人なりと敬い貴しうらうら
 やくゆられんはなならもくば唐主人おしお毎
 敷まてあらんなりこゆらんわりそくせ入
 津まておの旅館と称らんそおをより
 うゆらんお公をて書付くよゆらんやそ
 布なすをそめし出うれお自らおのぬく
 ぬを旅館と免許あつてとゆれせとありし

其の長崎おまわらるるこしおいづこも因
 らぬおまわらるい商家と旅館と定ちありてその
 荷物悉く宿のあつたれまらぬいそ徳と得ら
 事上のぬくぬく一夜がむでいも宿る身と女
 ありたれい神よいのり佛よ移ういてしけら
 是と中難しと受うらん志うらふはる公官長
 のおおせおまわらるる我身切らる妻子女く
 沈を商人をめて衣含豊うあてお常にお楽
 かりけおせお何乃ららるる一婢一僕ありて
 身體の勞と脚もて家内常お静う也何と

異國の客に宿するの苦状とんとて、^お辯^り一^ふあ
 財物も逃さんけいひらとて、^の餘^のをさ^はば^らし
 るう^へ七十^をさ^しや^病く^死よ^臨り^ふの
 人^屋を^家財^を内^のけ^いの^む婆^をい^い
 男女もよく^の遺^言に^葬具^塔婆^は乃^まさ^の
 事^共中^を念^はり^志す^らあ^を終^りぬ^せり
 足^つく^は知^る者^希かり^ふか^の市^中に^あり^て
 世^邊と^て不^受安^逸清^潔乃^販市^中に^た込^と
 い^ふき^り布^が知^るさ^は知^る又^たら^か知^るぬ^し
 倍^つか^はり^しと^ゆい^ひぬ^くく^あん^志は^るぬ^を

○長崎直民三人

明暦のけうとよ^の演^の所^とつ^まは^語京^や市^ある^所
 と^るや^いい^り者^{あり}十二月^神事^{あり}け^り終^り
 朝^用あ^るそ^とく^ゆく^演た^る路^とゆ^いひ^の
 ま^あわ^りき^物を^くく^らん^まよ^とい^わぬ^をつ^らふ
 ち^やう^ゆい^んは^袋を^内よ^白銀^大か^らう^こ包
 け^りと^ゆい^ひさ^わり^ゆい^ひと^ゆい^ひ有
 へ^さる^れや^うそ^うの^者を^使と^ゆい^ひを
 二^河ら^り待^居られ^ど同^ある^人も^なけ^いは^いふ^程

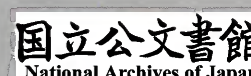


旅人のやせしやんとそそりし所より旅人
 を宿と家とふるむのゆへに旅人のよき給
 つるやどやあるもゆふ人よふまじりふとの白
 夕はさかひけりてわづらひらりあはれ始り候
 くらりたるやまのしづまのちりきりきれたるの
 袋のよきいづくしゆりぬけぬけいづれも
 我の蔭摩圓かげまのをきよめり人乃らそくぬきの
 質求りよとてゆきぬおとせしるふりけり候
 わづらひ我の命あるまじやんとてり者難と
 してゆりゆれと其のゆきぬおとせしるふり
 ぞとて思はれしやまのしづまのちりきり
 蔭摩圓とてりしるく圓の字僧何の乃海上
 物結とてりしる州子の書記して世にらり
 かりけおのて質素しつそ正直まこととて命いのちふをけり
 とのて思はれしやまのしづまのちりきり
 もわづらひぬきの法徳はうとくやまのしづまの
 とくさるふるまの領りやう乃恩澤おんざくとて長崎
 津鏡つみかきの字りてめり候たふりてめり候
 古今同郷の内も金銀法財と路みちと拾ひろひて

曾く取わづらふ事りて思はれしやまの
 を調へて思はれしやまのしづまのちり
 蔭摩圓とてりしるく圓の字僧何の乃海上
 物結とてりしる州子の書記して世にらり
 かりけおのて質素しつそ正直まこととて命いのちふをけり
 とのて思はれしやまのしづまのちりきり
 もわづらひぬきの法徳はうとくやまのしづまの
 とくさるふるまの領りやう乃恩澤おんざくとて長崎
 津鏡つみかきの字りてめり候たふりてめり候
 古今同郷の内も金銀法財と路みちと拾ひろひて

主紙のうらひで返さしめくし甚多しといふも
 貪むる身ありて多くの金銀と拾ひてくんと
 事は又希からん一寛文の頃や石川町と
 つよ又いふも一一人からがみ何事ともや
 之し者元旦乃末卯門松の枝は枝は枝りし金
 銀入るがやり枝は枝は枝りしと取入る程
 ものでと又わらうて怒り枝ともつてうら
 ていしう枝は枝は枝りし家もあつり
 商人うらもや掛金くは忘れてくつし物
 たり其人いつたりうらうらわらうたやうと
 とあるうらう枝と我物よんと移すを福と
 まのくもあつておのまうはまはて取れさ
 われ来る紙は右うら書ははは袋のまは
 来るしとう枝しとう一わらうは紙よあり
 うら又うらうれと人皆感しけるとうや子
 教ゆらんいひくもわらうはわらうれ又のうら
 六宮とうやゆえー

元禄のはやある者といふものあり佳し
 貧うらうと感したる事ありとくれい
 り志しと出立飯塚のわらうと通る小路



此袋の志をり物と見と拾ひて内へ金銀乃
 包らるる粒をりて強も少し入るるあてあり
 いかはわとより仕舞の目もあつて我跡を逃
 て去るべし我名はくつとものそ小舎の宿は
 何れにて赤間う関の宿はとれたりとて
 あつといふ家なる宿はいつとやりと委しく
 去る小舎をりて遊るる人よ不意あるる関
 へ海をりて二日と日見待居りしは仕舞わし中
 遊るる多し我は系へ備えをりて使僧りて
 既前既後のるるふ新念のれ物とありて神
 乃物取集るるのちとさんととる小馬替乃
 して金銀入の袋と共ひ作りて十方めくれ
 不くはとるるいし事き書付たは作りて
 神乃心念のりやと申のりて作りて思
 遊付るるゆゑ念はよきをりていふ
 いくは袋のすいにて入るるや神文神への
 物とれいしと事ありておのり物とる
 神慮も神とるしとて正直の一日の依
 ありとていつた終は日月の懐もやとる
 其後とるるさる事ありて饒たる身とる

長崎神話

ゆるん却て捨ひらい物を弘ひろむく久と来るが
 ぶとんき道みちさんしとすこしききんひん久と
 むんごたさうりまねたひひ弘ひろむく久と
 久と重おもく負おしき身みよいつ有ありたる久と
 孝このゆこあひわらうふして西せいくぬ物ものの
 わりたすこしきあやまらうとめつて大おほなる善ぜん
 事ことと捨すゆるん仁に者のゆめあはれわきさ
 りいまかしてろのまあ弘ひろむく用もちらる久と
 うか乃の師しさうんやいんや朋友とものゆとり
 むめくをた

○長崎義士二人

延寶乃以長崎甚饑うり小篠こさぎ吉左衛門よしかげとや
 つい若身わかみ貧ひしとすくおおりるをわ
 性しょう酒しゆを嗜たのみりる酒しゆ水みづ軒けんと号なづけ人ひと是こ弘ひろ
 淵ふ明みと字なをり孝こに書かけ見みる事ことと樂たのむ
 更さらうとむらと撫なむ酒しゆのわい剛ごうをゆり
 更さらうとむらと撫なむ時とき郷きやう民たみ大おほく饑うり一ひと寺てら
 の粥かゆを煮ゆく施しとわり日ひてふ救きう千人せんにんあり
 去いた衛ゑい門もん甚たく飢うりてしと七しち五ごの徒たごる人ひと
 幸さい弘ひろ死しけあし寺てらをふり到いたりてをばく



奮然のようわぶが米穀をく掃きかかれん感
 して受ゆさるるの條の人も後をぞとり
 とわれどみる受とそく人々もつとく我れ
 困りの由緒なく具人のくも謀りし功もほし
 由緒なく功もきて受らへん正さるる急
 難れ除んでい他の施しと受られしむわれと
 我れもむさるる人のく執心とどき動さしけあよ
 不受人とわらぬむと子分の事よかかきあり
 多し人の助施とくもん事と死つて死つるを
 せりわらへん見真室のくと近思録とあがく
 不しはあれて無死とくけく世の人とるに
 義士の家よしすれく人福と難と世にあられ
 わるい常れみさふり名うてひく人のまれと命
 をそのあふさふひたふけ小餘の市井の中に
 じりて泥土の露もよ色うとせりみさふれ
 程とありしづいとわく我ありうふ人けせり
 業いづもれて志る人さるをぞいそふれん
 室水の以一人の僧名の義觀と名えしあらし
 唐土人の教い詰る福濟禪寺に在て活
 の守りともん成るる本より学もかくオの

の長山神言
 の長山

今の義観は師へおのが罪をわく義にまごむ
 むり死とゆりぬく罪事のあつてみゆるせて
 わくころいふと身の罪とあり禱ひよ到らり識
 りぬまろく動く童蒙のそまのくはにえまろく
 やゆりつみわり

○長崎烈女一人

元禄のは桶屋某といふ者の妻年廿四五ころ
 魚ら林貞實たり子二人と有りみまると云々
 とたりしまの妻又は婦を懸想してなぐ
 いざあひたれどまごぶつどいふはうてゆくとまに

二人の幼きと捨ててまのわも痛くして
 月をまろくぬ舅をまろくに迫つて迫つてねく
 いまひたれど止りまをねばんとまあぐてわゆ
 日まも舅も子孫つきて外へあぐ遊ひくろみ
 よねおろくやあひたれ幼児一人寝るあご
 りふ自害志てまぬまろくあふ烈女なり也
 知人あれたるまろくあつたれ町の名もまれ名
 とまろくゆりぬく人なり悪名とあつたれは烈
 女なり本意はあつたれあつたれあつて追慕と
 ちりゆりぬ

長崎本言

三十四

右の外若し其人か益多しとすべし富家人金
 銀をもつて志願しごんを行ふをいふ人の感かんとる事
 かりし多し名利カウリの意ありて仁義と行ふを
 皆是若人たるべしいふ人や重く其財寶
 と教して若事とす人々や同郷の僅よちり
 かりやどしと捨子ととらして若し或は金銀
 をあつて人々若し或は貪人乃カウリ葬カウリ紙
 幣カウリとけ或は教導カウリ乃利益カウリと成べし経書を
 開板カウリし數千巻と法樂カウリとら人なり又一人
 財を捨て石橋を管カウリとくをて性来と助法カウリ
 人なり若し若仁義忠孝の徒なりあはれとす
 重しを得んや又はか否か今才能の人も多
 うれしく今とくをわらふさば

長崎夜話四

長崎夜話四

三十五

長崎夜話卅五

附録

○長崎土産物

○唐様畫師

第一唐様彩色也

又南蠻紅

毛油繪乃風と傳へる者あり也東の國か

くは長崎畫師を根本とて周碩生傳は

異國人直傳して因碩ハ唐風生傳ハ變流

たり又生傳ハ彫物名人也今は傳を

○眼鏡細工

鼻目鏡

遠目鏡

虫目鏡

敷目鏡

○磯目鏡

透間目鏡

近視目鏡

長崎匠人

○長崎夜話

淡田孫無衛といふもの壯年これ蠻國へ後で
眼鏡造り様と習ひ他人をうて生得藤七と
いふ者よ教つて造る事ありしより今にその
傳あり此孫無衛の武藝の達者細之井と子
ありし弟を淡田新藏といふ者あり蠻船か
系と世襲と因襲と折る日奉は東海
から大人團也到つててる者也友人共よ
且玉清を武勇乃働ありしに依り徳田より
高福を招かれし其志の事ありて仕官
せりてあり其後兄の孫無衛ありし弟

新藏肥後五百石とて約したり

礪子 是れ蠻人長崎を教つて造る初
より今其傳流絶せんとす今の上
と成りてはぬこれ器物紅毛の細工よ勝る
扱ひいふより造る白石他團はなれた石
たり長崎迄と海邊にあり茶磨石乃字
活り有りぬ不思議の事あり
土壺細工 唐人の自鳴鐘と書日本とて土
景と書ても可なり時計と書い字體
のふりも大小教あり枕土系根付土系

河原五

乃きどい皆之来南蠻國より傳く其の家傳今も伝不絶

○天文道具色々 日尺 星尺 圓規 日晷

渾天儀 星圖 地球圖 世界の丸

右の真鍮を造る物あり本を他もなかり

○真鍮細工色々 唐様彫物器物の類或は南

蠻如毛考の風俗を似せしる金銀の工が

象眼鑲 勳次を根本とし其祖蠻國より後

○アセ傳人本わり漢南鑲 本蠻流と傳人

ころ者なりとせ

○唐金鑄物 花入 卓香爐乃類皆唐風也

根本道助といふ者廣東國へ渡りて習ひ傳へり

○塗物道具 堆朱 屈輪 沈金 青貝 色蒔繪

種々器物皆唐風 堆朱ハ七部七膳と云り

○花手拭 南蠻傳 花鳥の形と志が伝へる

そのちり長崎舟一人の外に造る者なり

○深唐紙并紋唐紙 皆地色青紅黄又紫

色又水色桃を種々あり地紋色々切落入り

○わり

長崎本言

○造花 根平唐人より傳へり多くは蠟花

として又望める所の通草とありて造る物あり

○生花 亦ありていづれと見りまがはし通草の

長崎してあらば本とて俗よと灯籠より

○線香 根本五端一官とて又者福列より傳へ来

りて長崎して造り初め人より教へるより漸く

榮へり五端一官又子同なりて線香造りしに

子一官を後清川某く日本名を改て四姓

爺より友として福列へ姓し者也若考以化と

○唐風佛工 方三官と元祖とす二官は福建

道漳列の人を佛工の妙手なり其男子二人

皆又乃傳伝得たりとて佛工の甚妙を

勞し又其公と用ふ事深くさる所の靈像

今其事を得ると慈い母父の名と辱しめん

よりいして又死してはつるふ佛工を捨る一

男の醫術を好む人を患む次男と醫者を

好む人を好むる多し二人共々學才方々

次男の好む書紙能く草書好むるとして

より今七十餘歳存命なり二官乃作

の福濟禪寺乃法堂の本尊觀音の像則

長崎夜話五

長山不言

其作なり長五六尺其容儀端心なり其地
乃像小異なり此亦同一同作なり此像甚
靈驗ありて唐人いひ小女乃く長崎に唐人
敬慕し常に香楮供として祈願者甚多乃
笑を取人多く皆靈驗ありていひ

○珠敷 唐風色に望次第 紫且 黒且

白且 護神香 降神香 吹玉 色々

○石印彫刻 唐様 唐人 和入

○花毛纏 モウシ人傳來也大小色々

○女利安 紅毛詞なり故に文字を以て是は袋手

袋綿糸又い其線を添ふりあり根手

紅毛人長崎女人おむり色々のそりん

次第也

○畦足袋 昔に徳田よりありとて長崎

には勝り以上方法より貴者甚多なり

近年いひの如く貴人多くは

○花志 長崎の七の花津屋いし菌と赤く

思く清くあり長さい五間七間廣さ一

二間を以て望次第よりあり思くと根手

暹羅人の傳來あり

長崎廻船

の五

○長崎不詳五

○五

○箕盤 根本唐人傳來して長崎より流布し
今法中を造り及世に知人なり

○玉細工 蠻人唐人よいつまじ作を傳へて是
造珊瑚珠 宝珠に見似る事あり必と吟味

して求む

○外科道具 南蠻紅毛傳來を根本と
唐風竹細工 曲録 卓案 ぬぐこ盆色々

○唐船大工 唐船又紅毛船を小く造りて
賣り多し泉水をふらうり事なり

○石橋唐風石工 何れも教人あり

○髮紙 二三尺四方より長く廣く濶く色白し
昔は法園より賣出じしは近年は異人より
多に及多く濶くしは清帳紙多し
他國よは紙をとりて作り紙はたたりみ
して出らるりしは紙證文より用紙
紙なり

○綿糸 唐人傳來万吉と根本とに古
唐より牛の糸を以て造れり末代懸乃
糸と作りしは

○煙草 蠻人種子と持ちて長崎揚子場と

○長崎煙草

○六

つとて植くより香ねく世よりあつたれり此
たつと今も標る傷のきんごこの色も香なりし
他取との各別きるもの也は草の日本は東方
みわびつとくさつと國わうはあふ一人乃て女
わうもみ淡婆姑とつと國中の男子は女を
あつとふもの甚多くりし死せし後まて世も
あつとび人多くてわう附一人乃男子は墓に
詣ぐしに秋の日早く暮ふ多し其後しあ
通夜せしああふと甚くいり何うのあつとを
標るこれぞ草のあつとけさわう一毒とせりて

冷つと飢あつらにやも身温くみ冷風肌へと花と
まあふして障氣を治ぐ事酒を飲つがこと
けあふ南盤抄と号し又の煙酒をいひわうい
相思草とつとつと見より世果萬國は流布に
一度は煙を吸わう人の見はあつたんやうて
三つと事わうつと相思草の名最たうくれ
其の能毒如た

能の煙を吸く禁氣を消さる氣力と益
と嵐障氣を避く冷濕を散く毒を解く
爰よ入く蠹虫と除く脂の蛇毒を解く法

毒瓜堅くは金瘡よ毒瓜付く血を止む内障の眼又青盲に好むとすもいふ其験をんそ又煙を吸く含と消とす

毒ハ多ク煙を吸くは口中損と又上氣耳鳴よとへ眼病よ可禁但虚眼よと忌むとすも多ク吸くは相火を助くる故に仇也なりとす常以多ク吸くは呼吸と暴にして血脉進敷るなり故に壽命と減るの怨ありとんや壯年血氣強盛るる人をや痰喘乃人可とる勞瘵の病也禁とす胃火瓜

ま心熱を壯くは

煙艸の毒瓜解とる方 麥門冬 紫葳子

瓜葉仁 枇杷葉 耳艸 以上五味等料如

常煎一查を去て砂糖一兩を入く服を心

妙なり

○南瓜 紅毛詞なりぬるとすは種唐土日本

ぞ小亞媽港呂宋等の南蛮國より傳へり

長崎也又正年中より番種く農家も造

り唐人紅毛も賣て生計とすとるれも本

草綱目等にも毒ありて人よ益をたすなり

長崎遊記五

之れを思ひて世に食する人ともありし迄也
徳興の流布して人毎に食するに其害
の甚きと云ふに民家常に食して朝夕の
助と云ひ是と食して害ありしといふは
おろみか肉合れ菜にして南瓜の菜といは
れど牛羊猪肉多し加へて考へて過食
し又熱酒を飲ふ依りて食滞法病を
生ず肉は別是南瓜の毒ありといひて肉
合酒飲ふ毒ありし事と案を以て家乃
民の考へ南瓜一味ありしは麦粉餅を食を

考へて喰ふといふ過食のどうありたり病家と生
きし事を志し以て本草綱目四代までいひて南
瓜の性詳し小毒者といふありしや都て菓乃
類其形ら小き物よ必と其氣味強く毒あり
との多し其形ら大なる物の却て氣味弱く
毒なり物多しを瓜付て撰し
西瓜 是れ本草よいかくして瓜乃地よりい
るよりありしや日本よいか列し傳へ薩摩肥
後の天草肥前の島來をふ多く作らる
まより徳圃へ弘まりぬ系於一流布するに實

本草綱目

瓜

承乃比よりとらや園東へい又後弘まわりの
け物又人の益多く世乃知とら也長崎より種
ふれ又多し

右乃芥菜菓草木の類異國より傳へ多長
崎より多を物種く中より其今代へ地西へと
傳へ弘まりてゆくとせらるれ又多々れい盡く
化さず

○八升豆

隱元和尚持来く種子と南原ちの
ゆりゆり中り種より世に流布と此類より隱
元豆といふり又南原豆といふりけ亦唐の物

ノハ 天茄 唐菜 芥藍 金紫菜乃新種

多し又南蠻紅毛より傳へる草木多し

多し又南蠻紅毛より傳へる草木多し

紅毛の竹 らぶぶ花 け亦弘多し

○ぢやか 蠻國乃柑類也之と日本の柚弘は

あり合をるるをめぐり切結わり都て垂ふ

より傳へる柑類長崎より多しおんちりもよ

よの類は皆柚とい橙乃類いよと菓子に合

とる事希しちりけ亦種多し

○赤芋琉球芋 二種一類と赤芋いよとて

耳味なり赤羊の薄皮の紅色して心は甚白く
琉球羊の内は黄色の耳味なりとて田家多く
種々糧として近年乃乳を脚を脾胃を
補ふ利益甚多し根卒長崎より薩摩より
傳へて今い九列に流布は但寒地より學
びて唐人の酒りも造り又水産一物を
取く餅やしらへ上品の物なり

○唐菓子色々 香餅 大相麻餅 砂糖鳥

羅保衣 香沙糕 火繩餅 胡麻牛皮

玉露糕 賀饅頭 ほか後し皆唐人の物也

○變菓子色々 ハルテ ケジャアド カステラボウル

花ボウル コンペイト アルル カルメル ヲベリヤス パスリ

ヒリヨウス シブダウス タニコソウメン ビスカウト

パン ほか後し

○石火矢 昔は長崎治工鑄るものありと云ふ

一都て石火矢の事近代は薬師寺某徳主

よりて公用の外毎りに鑄事と不許軍用

擊火矢の事い薬師寺家傳秘習する人法

小多し石火矢大小色々皆鐵又い即金也

唐紅り抄りの棒火矢とて百目玉より大

長崎不詳

なるはあり紅毛乃石火矢ハ二貫目玉あり
く三百目玉もわり又圓崩とそ右あり
此玉長崎大波止あり長崎一見乃人
らとるる

石火矢ハ文字定りて明朝萬曆以来の物

なるゆへ右名あり年外一百年以来日本に
て用字ありて記と

大鏡 唐の書海外説話出又
日本羅山文集出

鳥鏡 鐵炮を云文字加て
石火矢とす

西澤砲 上同書に出砲ハイハ
ジキト訓ス

○日見橋 本の大さ圍一丈一尺地より九尺

直く立て大枝八方に分進傘とひきさるる

して東西十二間南北十二間本と名をさす

間より花の如き象とて形並ハ一山乃高と

見ゆ地とは本ハ天正乃以蠻人の橋より橋

なり寺の櫻谷寺といふなり本ハ崎の領地が

寛文乃以より公領となりぬむの以長崎の

男女しき本と二里乃山路より袖張つる孫都

人わりのりこし人わりの詩よりよきはく

系竹のいよきか人竹酒造りたのちもあつり

くげりて唐土人乃詩をいよきとあつり

かしきふしむさむさどかめをく前乃さるる領
至高力氏高領を相平氏長崎代々の刺史
皆行見ぬわさひまいぬ其中和奇へ一二首
忘れゆし縁い今実ぬ志るるぬ

あつゑ城を高力氏 自筆の懐紙様谷ちる

都々日見の橋を人とりていさるる人言の埋本

又他人乃鉄くや日見橋をりて

又さといわめでもめいのはらけのちれ埋本

此も長崎日見山乃橋をりて人かくじき

はらるるよりいさるるゆかりでさるるい

ゆてえぬ花やむらさきさるる山さるる

此段白る山を因点わりし中なり

誹諧發句

日見乃花や我あが目よいより山の 南元順

花ゆよ日見とや人のからさるる 内田信水

けか奇数多るるさるる

右の日見橋今い伝るるさるるさるるゆりぬ

都て人れ世の奇極くのじ何るさるる

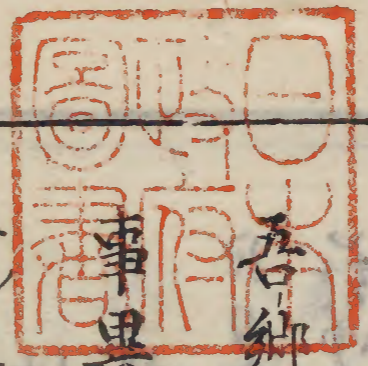
天竺震旦よりいさるるさるるの内乃ゆり物

いさるるさるる

長山不言五

夜話中後叙

頃家父應京師書林之需而使阿弟
綴長崎夜話中尋許以彫干梓也蓋
吾鄉也雖在於西極邊鄙之域然逸
事異談間有聞者亦不寡矣但惜乎
世之莫敢知焉故嘗舉所聞見者數



件而單之用和字也偏在於欲使童
蒙鑑既往以發勸懲之意也已
是家君之志爾

享保庚子孟春吉且西川正昌書於省雲齋

京六角通御幸町西入町

茨城多左衛門繡梓

長崎夜話五

高陽求林齋西川先生撰述

兩儀集說外書天文義論 二冊

天文和譯注 一冊

日本水土考 并兩域人數考 一冊

四十二國人物圖說 一冊

町人囊 并底拂 七冊

長崎夜話 五冊

水土解辨 二冊

平安柳枝軒刊行

虞書曆象俗解 二冊

幹枝數原 未刻 二冊

運世年卦考 同 一冊

氣運論 同 一冊

天人五行解 同 二冊

右旋有無論 同 二冊

書

林

京都寺町通佛光寺

同 貳丁目

同 貳丁目

同 四日市

同 本石町十軒店

同 下谷御成道

同 大傳馬町貳丁目

同 芝神明前

大阪心齋橋通本町角

大阪心齋橋筋博愛町角

河内屋藤四郎

須原屋茂兵衛

山城屋佐兵衛

須原屋新兵衛

山城屋政吉

英夫助

英文藏

丁子屋平兵衛

岡田屋嘉七

河内屋藤兵衛

河内屋茂兵衛

